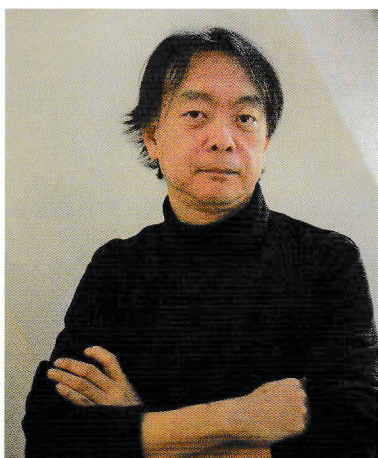


魂を癒やし、人と人をつなぐ 音楽の力を信じて

ほ・っ・と・な・出・会・い

指揮者 吉田 裕史さん



戦禍のウクライナでタクトを振る

ウクライナ・オデーサ劇場から「9月の開幕コンサート」の指揮をしてほしい」とオファーがあったのは、ロシアによるウクライナ侵攻が始まって間もない2022年5月。音楽監督、および首席指揮者が立て続けに辞めてしまい、首席客演指揮者であった私に白羽の矢が立ったのです。ウクライナ全土がレベル4の危険地域に指定されており、基本的には渡航禁止。外務省をはじめ家族や友人、あらゆる方面から猛反対されましたし、私もすぐには返事ができませんでした。2、3か月悩みましたが「人として、音楽家として正しいと信じることを貫こう」と決意し、翌年9月初旬に隣国モルドバから陸路でオデーサに入りました。

頻繁に起こる停電、爆撃の音、避難警報が鳴るたびにシェルターに駆け込みながらのリハーサル……。オデーサの日常はまさに「死と隣り合わせ」でした。「なぜ逃げないの?」と思われるかもしれませんが、海外、特に欧州では音楽を、人間に不可欠な魂の癒やしと捉えていて、残った楽団員たちは人々が傷つき、恐怖に耐えている、今この場にこそ音楽が必要なんですと信じ、演奏を続けていたのです。

迎えた本番。9月10日の公演は幕が下りた後も拍手が鳴りやまないほどでした。さらに兵士

たちが舞台上上がってきて、涙を浮かべながら「美しい音楽をありがとう」と私の手を握ったのです。あの日を生涯忘れないと思います。

魂の音楽を日本に

帰国後、彼らの魂の音楽を日本に届けたいと来日公演を企画したのですが、どの興行会社も「採算が合わない」と取り合ってくれない。ならば、自分たちでやるしかないというクラウドファンディングで資金を募ることに。結果、2000万円以上の寄付が集まり、さらに、企画に賛同する企業、行政からも支援をいただきまして、今年の3月、横浜、神戸、北見での公演が叶いました。全ての回で会場が一体となるようなスタンディングオーベーションが起こり、言語を超えて人と人をつなぐ音楽の力を改めて実感しましたね。日本に避難しているウクライナのかたがたを招待していたのですが、聴きながら涙を流されているかたも多く、故郷の音楽がわずかでも彼らの心を癒やしたならば、音楽家として少なくとも一つは役目を果たせたかなと、胸をなでおろしています。

指揮者を志したきっかけ

音楽に親しんだのは父の影響が大きいと思います。父は映画音楽の愛好家で、家には大量のLPレコードがあり、私自身も気づけばレコードに針を落として音楽を楽しむ子どもになっていました。ピアノを習い、中・高と吹奏楽部でトランペットを吹いていましたが、思い描く進路に指揮者は含まれていませんでした。

ところが、高校2年生の冬、忘れもしない1986年2月。部活の後輩が小澤征爾さん率いるボストン交響楽団の日本公演チケットをプレゼントしてくれて、聴きに行ったのです。その公演、その指揮に衝撃を受け、一瞬で道が決まりました。しかし、どうすれば指揮者になれるかがわからない。インターネットもない時代、本屋に行っても指揮者のなり方を解説する本な

どないし、誰に聞いても手掛かりすら得られず、しばらく途方に暮れていました。そんな時、アルバイト先の店長が学生時代に上智大学管弦楽団のコンサートマスターを務めていたことが判明したのです。後日、店長が吹奏楽の神様と呼ばれる指揮者・汐澤安彦さんに引き合わせてくれて、そこから道が拓けていきました。

私はよく子どもたちに、人生に大切なものは「読書と旅、出会い」と語っているのですが、読書も旅も人との出会いも自分という枠から一歩外に出る行為だからです。私自身も人との出会いによって夢を叶えることができたし、その後も人生の岐路に立つたびに、自ら外に出て行動することで、会うべき人に会えて、そして導いてもらったと思っています。

音楽とは楽しむもの

日本では大人も子どもも「クラシックは堅苦しく聴くもの」と捉えている節があつて少しもつたないと感じます。イタリアの子どもたちは、オペラで悪党をやっつけるシーンでは「やっちまえ!」と叫び、愛を語るシーンではヒューヒュー指笛を吹いてはやし立てるんですよ。音楽の「楽」は、学、ではありませんよね。偉大なる先人が、音楽に、楽しむ、というすばらしい漢字をあててくれたのです。ぜひ肩の力を抜いて楽しんでほしいと思います。

吉田裕史 (hirofumi yoshida)

1968年生まれ。イタリア・モデナ・バヴァロッティ歌劇場フィルハーモニー音楽監督。ウクライナ国立オデーサ歌劇場首席客演指揮者。2023年戦禍のウクライナで指揮。クラウドファンディングで2000万円以上の寄付を集め、2025年、オデーサ歌劇場オーケストラ日本公演を成功に導く。国内外でオペラの振興や音楽を通じた国際交流に功績を残したとして文部科学大臣表彰を授与される。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆巻頭インタビュー・浅川智恵子さんのインタビューに大変感銘を受けました。子どもたちにとんな小さなことでも自ら決めたことをやり遂げる「軸」を持ってほしいというメッセージから、選択肢が多いことが必ずしも良いことではなく、その環境下でどう努力するかが大切だということを変えて教えていただいたと思います。
- ◆「北から南から」の四街道市の取組について。青少年の健全育成諸活動に高校生も加わっていることはすばらしい。とくに補導委員達のパトロールと一緒にいることなどは、小・中学生や高校生達に身近に感じることでしょう。
- ◆八王子教育委員会の不登校対策の方向性に「学校の内外で専門的な相談・指導を受けていない不登校児童生徒をゼロにすること」とありました。この対策に賛同です。

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

教育出版は、無限の可能性を秘めた「学びのチカラ」を教科書という形で世に送り出し、子どもたちの成長に貢献してきました。

これからは学びの「場と機会」を、家庭へ、地域へさらに社会へと広げていきます。学びのチカラで「自ら問い、考え続け、行動し、社会を創っていく人」の成長を支えながら未来へとつないでいく。そのような次代の教育をリードする企業でありたいと考えます。

教育出版